

35 カスパール・ポーアン “Theatrum
Anatomicum” について (1) —— 初版
(1605) と第二版 (1621) の序文の比較検討

月澤 美代子

『解体新書』翻訳によって、アナトミアは西洋医学を象徴する学としての意味をもった。さらに、ポンペ以降、「解剖学」は西洋医学の基礎としての体系的な学として、明治期の日本に移入されてくる。

中世スコラ医学においても、アナトミアは、医学体系の中に位置づけられていた。しかし、一六一一—一七世紀西欧において、アナトミアは、医療のための基礎学としてばかりではなく、文化的な意味を与えられ広く社会の中へ浸透していた。

この一六世紀後半から一七世紀初頭におけるアナトミアを最も特徴づける解剖学書とされているのが Caspar Bauhin (1560—1624) の “Theatrum Anatomicum” である。

ある。

Caspar Bauhin は、フランスからスイスに逃れた新教徒 Jean Bauhin の息子としてバーゼルに生まれ、バーゼル大学医学部で Felix Platter らの指導を受けた後、北イタリアへ留学。パドヴァで Fabricius の元で人体解剖を経験し、セント・フランシス病院で Marco de Oddi らに、植物園で Melchior Wieland に学んだ後、ポローニヤで Aranzio に、パリで Severin Pineau にアナトミアを学んでいる。バーゼルに戻った後、人体公開解剖示説講師、ギリシャ語講師、そしてバーゼル最初の解剖学教授として、この地へ当時の最新のアナトミア、植物学を移植・定着させた人物である。

Bauhin の著した解剖学書・植物学書は、出版都市バーゼル、フランクフルト等で次々と出版された。“Theatrum Anatomicum” は、この Bauhin の解剖学教科書の代表作とされているが、筋肉の命名を整理した他は、解剖学上の新発見・新知見に乏しく、解剖学史の中では、これまで低い評価が与えられてきた。

しかし、“Theatrum Anatomicum” は、同時代に対し

て極めて大きな影響を与えた解剖学書であった。すなわち、Vesalius の “Fabrica” 等に比べ、コンパクトに纏められていて使用しやすく、しかも、図版が多く取り入れられ、古代の権威のテキスト、近代の解剖学的新発見に関する注がきわめて充実しており、人体解剖の初学者、および、その指導者にとって利用しやすいものであった。また、アナトミアに関心をもつ当該時代の知識人にとってもアクセスししやすいものであった。血液循環論の提唱者 W. Harvey は、解剖示説講義準備ノート “Prelectiones” の基本的なテキストとしてこの本を用いたし、機械論哲学の代表者 Descartes がアナトミアを学ぶにあたって用いたのも、この Bauhin の本であった。こうした側面の他に、Bauhin の解剖学書には、もう一つの重要な面がある。すなわち、宗教的な側面である。この本は、改革派の中心都市バーゼル大学教授にして、バーゼル市の首席医師によって書かれた。Bauhin にとって、アナトミアとは、キリスト教的文脈の中での人間的存在そのものを問う宗教的な営為でもあった。こうした側面をもつ本書は、宗教改革を経たプロテスタント都

市の大学教育において、アナトミアの導入に伴い基本的なテキストとして使用されていく。

今回の発表においては、この “Theatrum Anatomicum” 初版 (1605, Frankfurt) と 第二版 (1621, Frankfurt) の序文 “Praefatio” を比較検討し、一七世紀初頭の阿里ストテレスの自然哲学とキリスト教との緊張関係を探り、ハーヴィ “De Motu Cordis” の準備された時代のアナトミアをめぐる状況を紹介していきたい。

(順天堂大学医学部医史学研究室)